



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail : daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

「一分間の出会い」

「Are you a Japanese?」

「Yes I am」

女子学生から「日本人ですか？」と声を掛けられて気を悪くする男子はいないであろう。(もちろんわが輩もそうだよ)

「私は日本に興味をもっています。名刺を頂けませんか」

はい、はい、と軽々に手渡すわが輩は軽率者だろうか。

1999年2月わが輩とドクターOとその娘Hの三人で砂漠の州ラージャスターンを巡っていた。アーメダバードから、地底に埋まる階段井戸や太陽寺院などを巡り聖山マウント・アブーに至った。途中マヘーサナという田舎町に立ち寄った。

この町には共に学んだ友人が住んでいた。わが輩はビリから三番で試験に受かったが、彼はビリから二番であった。もともとは南インドのアーンドラ・プルデーシュ州出身だが、父親がカレッチの学長に就任したので西インドのグジャラート州に移って来た。

サラリーマンを辞めて二度目にインドに行ったとき、彼の親戚の家に世話になった。彼の姉がインドのユダヤ教徒と結婚していたので、その親戚の家に居候することになった。彼の両親は大反対で勘当したが、姉を慕う彼は宗教に関係なく付き合いをしている。いつか親子の関係が修復することを願っていた。

わが輩にとって大友人だが、ある時から音信が途絶えてしまった。立ち寄って捜したが転居していて行方不明になってしまった。

(すごく落胆したよ)

聖山マウント・アブーには、ジャイナ教の寺院がある。外からみると簡素だが、内部は豪華な大理石の彫刻で飾られている。イスラム教の破壊を恐れて、外部は意図的に簡素にしてある。

また、ブラーマクマリスと呼ばれる瞑想施設もある。そこで、ばったり知己の日本人に会ったのには驚いた。

聖山を下り湖の街ウダイプルに向かった。湖中に浮かぶホテルは観光案内の写真に載るほど有名である。一度は泊まってみたいが高いので泊まれない。小さい部屋(団体客用)もあるが、かつてサーバント専用の部屋であった。サーバント気分を味合うより安いホテルに泊まった方がよい。なにぶんにもドクターOは裕福だが、わが輩は貧乏だからである。

このウダイプルで女学生に会った。わが輩の記憶では、彼女は“顔無し女”である。いや、次に会おうまで名刺を渡したことさえも無意識の中に沈んで浮き上がることがなかった。

たった一分間の出会いの記憶、しかも 17 年前のことである。2016 年 1 月 29 日のデリーからムンバイへの機内で、たまたま隣に座ったのが彼女である。顔の無い彼女にわが輩が気づくことはなかった。まだ無意識の中の塵に過ぎなかった。

「日本人ですか？」

彼女の方から話しかけてきた。流暢な日本語である。実は彼女も関空から搭乗していたが、デリーで機材が変更になったため隣席になった。偶然の悪戯か。

聞けばわが懇意の研究者 K や O 教授を知っているという。話が弾み名刺交換になった。

「ラージャスターンでお会いしましたね。あなたの名刺を持っています」

読者諸氏よ。驚くことなかれ。わが輩の記憶マシンが一気にフル回転し、あの一分間の出来事を思い出させた。依然“顔無し女”だが、あの事象を浮かびあがらせたのである。

(わが輩の頭脳もまんざらではないだろう！)

「大魔王よ、名刺を悪用されませんかね」

と、ドクター O は言った。そのコトバさえも浮かびあがらせた。

「たぶん、女学生だから大丈夫でしょう」

と答えた記憶がある。

待て待て大魔王よ。これは都合よくわが脳が創りあげた“創作”かもしれない。

そうかもしれないが、ラージャスターンで会ったこと、名刺をあげたことだけは事実である。

読者諸氏よ。もう一つの偶然を披露しよう。

わが輩は、その時インド愛好会「プルニマ」の主宰者 N 女史と編集長 U 女史等数名とともに古代遺跡ドーラヴィーラーに向かおうとしていた。その中にドクター O もいた。興奮したわが輩はドクター O に話したが、彼の記憶の中にはなかった。ドクター O は頭脳明晰、成績優秀な方、わが輩は頭脳不明晰ビリから三番だが、この一分間の記憶だけは勝っていた。

機内で再会した女学生と話したのは 10 分程度。

さて、あの女学生は、今どうしているのか。再び会えるのか。

それにしても、17 年の歳月、時の流れとは何か。そもそも「時」とは何か、一分間とは何か、その「時」の中になぜわれわれは存在し出会うのか、その意味を次号で語ってみたい。

このエッセイを読んだ善き者は、“一分間”でわが輩と繋がっていると思わないかい。読者諸氏よ。

今年もよろしく！